# 第23回文芸講演会

## 柏木隆雄　先生

# 日仏で金銭感覚に差

三重日仏協会講演　柏木さん（殿町出身、仏文学者）、文学から解く

フランス文学者で松阪市殿町出身の柏木隆雄さん（79）＝兵庫県西宮市在住＝が7日、津市の県生涯学習センターで「文学の世界から見る音のお金、今のお金―かねに恨みはかずかずござる―」と題して話した。三重日仏協会などが主催し、柏木さんを迎えて毎年開かれている文芸講演会の第23回。会員や一般市民ら24人が聴講した。同講演会は33年続いており、1999（平成11）年からは毎年開かれている。

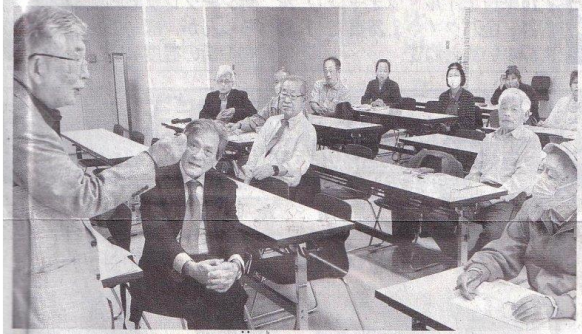
柏木さんは大阪大学と大手前大学の名誉教授で、大手前大では学長も務めた。専門はバルザックやルナールといった19世紀フランス文学だが、日本文学にも詳しく、この日は井原西鶴や上田秋成、尾崎紅葉、太宰治らと、バルザックの小説を対比、作中に現れる金銭に対する感覚の違いを浮かび上がらせた。

戦国武将・上杉景勝の重臣の直江兼続（かねつぐ）が素手でなく扇子で小判を受け「卑しき物を取れば汚れるので扇に載せて拝見つかまつりました」と言ったというエピソードから、まず清貧を重んじる日本の文化土壌を見ていった。

秋成の「雨月物語」からは、蒲生氏郷の家臣で倹約家で知られた岡左内（さない）が登場する「貧福論」を引用。「（左内の夢枕に立った）お金の神さんが『貧富はその前世の行いによる。善を積んだ人は金持ちになる。その人自身が金持ちにならんでも、子孫が金持ちになったらそれでいいので、自分が善を尽くしたらいい報いがあると思うのがいけない。ひたすら真面目にやっておればお金は入ってくる』と言うんですね」と。

また西鶴の「諸国はなし」からは、貧しい親戚のために金持ちの医者が「貧病の妙薬だ」と10両をなげうってうたげを開いた時、1両がなくなって騒ぎになりかけたが、丸く収めようと自分の懐からこっそり代わりの1両を出した人がいたという話を紹介。柏木さんは本物の小判を持参しており「教え子の庄屋さんの子孫に借りてきました。テレビで見ると重そうですけどペンペンでね…。実物を見な、分からん。（会場に）回してもいいけど、なくなったらあかんので」と笑わせた。

一方のバルザックの「ウジェニー・グランデ」は純情無垢（むく）な娘が資産家になっていく小説。「財産と人間の生き方は、実は切っても切れないものがあるんだということを堂々と書いていくのが西洋」と言い、「日本は、金銭というのはあくまで卑しいものであるというのが染み付いているような気がする。東西の文学で金銭がどう位置付けられているかという目で見てくると、それぞれの気質が見えてくるのではないか」と結んだ。



持参した本物の小判を見せる柏木教授（左）＝津市の県生涯学習センターで

夕刊三重　4月9日